

9 漢方薬と私

クリニックサンセール清里 泌尿器科
岡村 武彦

医師となって初めて薬を覚えたのは、当時教授や助教授の外来で処方箋を代わりに書いていたいわゆるシュライバーの時であった。それぞれの先生によって癖があり、当時助教授であった先生が漢方を好んで処方されていたことを覚えている。そんな訳で、医師1年目から漢方に対しての違和感はなく、自然に名前を覚えていった。猪苓湯、八味地黄丸、麻黄附子細辛湯が最初の漢方ベスト3であった。その後、年とともに病院も変わり、結婚して、2児の父親となり、患者への漢方処方のみならず、自分自身や家族への処方も行うようになった。漢方薬との出会いから定年退職後のクリニック勤務までの45年間の経過について私自身を症例として報告する。

症例：70歳男性。1980年に医師国家試験合格。卒業とともに某大学泌尿器科入局。人手不足の中、2か月後には助手(現在の助教)となる。入局当初から教授・助教授などの面々の外来で処方薬を書きながら薬を一つ一つ覚える毎日であった。その中で名前は憶えても、どの病気に対してどのように使えばいいのか理解できない多くの漢方薬に悩まされ、名前だけ覚えるにとどまっていた。しかし、結婚後第二子が生まれたときに低出生体重児で臍帯ヘルニアを合併。出生直後の緊急手術となった。幸い経過は良好で、すくすくと成長したが、小学校前までは時々軽い癒着性イレウスを起こし、小児外科の先生が小建中湯を処方してくれた。ここから漢方もしっかり勉強なくてはと思い始めた。その後アメリカに留学するまでの10年間で3か所の病院勤務を経験したが、すべて1人赴任。患者と向き合って不定愁訴や通常の処方で改善しない患者に対して漢方薬を積極的に処方するようになった。このころ熱意をもって情報提供を行ってくれた優秀なツムラの方々のサポートがあったことだった。また、このころから自宅に常備薬としてロキソニンとともに五苓散と芍薬甘草湯を今まで切らさないようにしている。患者40代前半、留学から戻り、また別の病院勤務となって間もなく、突然右側腹部痛出現。大学病院ERでCT施行。右尿管結石と診断。担当医から坐薬+猪苓湯の処方。2週間で自然排石。猪苓湯のすばらしさを実感。これを契機に猪苓湯の処方量が急増(それまでは尿管結石に対してウロカルンを頻用)した。このころには漢方のレパートリーもかなり増えており、精神的に弱い患者や、女性の更年期、LOH、ED、術後イレウス予防、食欲不振等々、気づけばかなり多くの漢方を処方していた。患者は65歳で定年。1年の再雇用を経て現在のクリニックに勤務。内科の患者も多く診るようになった。3年前からはクリニックで有病棟も立ち上げ、入院患者の便秘処方として麻子仁丸、不眠や怒りっぽい認知症患者に抑肝散などを定期処方するなど、漢方と歩み続けた医師生活が今も続いている。